

第9回国際地学オリンピックブラジル大会の 日本代表選手が決まりました



地学オリンピック日本委員会は2015年3月31日、ブラジルで開催される第9回国際地学オリンピックの日本代表選手を発表した。代表となったのは、沖中陽幸（広島学院高）、辻有恒（灘高）、土井聖明（広島学院高）、茂木隆伸（筑波大付属駒場高）の4名で、いずれも現在3年生。

派遣選手は、昨年12月21日に全国78会場で実施の日本地学オリンピック予選、3月15日～17日の同本選と引き続き行われた17日～18日の代表選抜を経て選ばれた。

このほか、次点として坂部圭哉（海陽中等教育学校4年）、西尾真輝（海城高3年）の2名が、国際大会特別派遣生徒として三重県でトップの成績を収めた角谷優馬（津高3年）が選ばれた。

日本代表と国際大会特別派遣生徒は、通信研修や合宿研修を経て、9月13日から8日間の日程で、ブラジルのミナスジェライス州 ポソス・デ・カルダスで開催される大会に臨む。（敬称略）



（左から辻選手、茂木選手、土井選手、沖中選手）

志高く - 代表への軌跡と決意 -

『友』と共に！

広島学院高等学校3年 沖中 陽幸

中学3年生で初めて日本地学オリンピック本選に進みました。試験への緊張以上に、研究者の講演を聴き、研究所を見学し、何より全国から来た地学好きの同世代の人との雑談が楽しかったことを覚えています。わずか3日間でしたがここに帰ってきたい気持ちを強く持ちました。

次からはお前が行けたならと予選に参加する友人が倍増し、一緒に勉強できるようになりました。地学の先生が本選に向けて勉強会を開いてくださるなど、広島学院では地学を勉強する環境が整っていました。おかげで、その後も連続して筑波に戻ってこることができ、今に至ります。

自分のまわりに地学を勉強する環境があったこと、これが地学を続けた大きな理由の一つです。これからは代表の仲間とともに国際大会に向けて研修をしていきます。国際大会では積極的にディスカッションに参加したいので、足りない部分の勉強共々、9月に向けてしっかり準備していきます。

日本代表として参加する以上、目標はもちろん金メダルです。ただそれ以上に、世界中の代表の方々と交流し、外国でのフィールドワークを行えるこの貴重な機会を大切にします。

これまで一緒に勉強をしてきた友と共に！

「日本代表の心得」

灘高等学校3年 辻 有恒

昨年度、本選・代表選抜へと進み、自分もあれ程のものになりたいと思ってから一年。しっかりと力をつけたという自信をもって今年度の本選に臨んだ。

試験結果を分析し、自分の課題は主に二つだと考える。まず鉱物や化石の鑑定に関する経験不足。国際大会では野外調査の日程も組まれているのでそれまでに実地でも博物館でも実物によく触れておきたい。もう一つは注意不足によるミスだ。これはとても悔しい。普段からの心構えをしっかりとっておこうと思う。

国際大会の場では、交流というものの意味がさらに大きいだろう。大会日程でも交流に割かれる時間が多いいことはその表れに違いない。そこで重要なのが英語

コミュニケーションの能力だ。聞いて、理解して、応答する。時には積極的に話題を投げかける。母語なら当たり前のこの一連の動作を、何とかして英語でも円滑にしたいと思っている。また同時に、多くの話題について関心を持ち、筋道だった意見を持つということにも意識を向けておきたい。普段の学校の授業も活用して、これらのことについて継続的に努力を重ねたい。そのうえでこそ、本当に国際大会に行く意義があらうかと思う。

国際大会に向けて準備したいことは多く、しかし時間は限られている。このチャレンジングな状況にうまく対応し、国際大会を楽しみたい。

「1868 分の 1 を楽しむ」

広島学院高等学校 3 年 土井 聖明

去年、初めて地学オリンピックに挑戦しました。本選では全く歯が立たずに敗退した一方、同級生は本選を突破し、悔しい思いをしました。しかし、本選ではいろいろな施設見学ができ、楽しかったという思いもあり、「今年こそは」と地学図表を読み込み、再挑戦。同級生と一緒に代表に選ばれてよかったです。

第 7 回日本地学オリンピック受験者 1868 人の中から選ばれた代表としての責任を持ち、金メダルを目指します。国際大会で良い結果を残すにはすべてのジャンルができることが必要となるので、これからの研修や自主学習を通して、よい結果が残せるように頑張ります。

今回の大会はブラジルということで、おそらく人生で最も遠いところに行きます。気候や文化なども含め、人生初の南半球を楽しもうと思います。また、世界各国・地域から集まってくる優秀な海外の選手とも交流していこうと思います。海外選手と交流するためにも、世界大会までに地学だけでなく英語力も上げていかなければなりません。やることは山積みですが世界大会に出られるということにわくわくしています。

「魅了され、挑む」

筑波大学附属駒場高等学校 3 年 茂木 隆伸

今回の本選は私にとって三度目の、そして最後の本選でした。一度目は、産総研地質調査総合センター特別賞（鑑定一位）とつくば科学万博記念財団理事長賞（中学生一位）を受賞しましたが、高校生との格の違いを感じ、二度目は計算問題の多さに全く抵抗できず、

参加証明書だけをファイルに挟んで帰りました。そして今回、日本代表に選ばれたことをとても嬉しく思います。

振り返れば、地学に興味を持ち始めたのは恐竜にはまった幼稚園の頃。中学生ではカンブリア紀、特にあの見目麗しいオパビニア・レガリスに五つの瞳（複眼なので瞳はもっと多いと思いますが）に魅了され、古生物学にずっと興味を抱いてきました。

実は、高校二年生のはじめにオパビニアの着ぐるみを自作し、代表選抜の面接では、国際大会でこれを利用したパフォーマンスが出来ると宣言してしまいました。ところが、この着ぐるみは現在、あまり状態が良くなく、直さなくてはと思っています。

国際大会の開催地、ブラジルのポソス・デ・カルダスはあまり化石の話聞かない土地ですが、代表に選ばれたからには金メダルを狙って勉学に励みます。特に、物理を履修していない身としては、弱点である気象・海洋を強化していきたいと思います。古生物に魅せられています（オタクです）が、とにかくしっかり学んでいきます。応援いただければ幸いです。

「実力で！」

三重県立津高等学校 3 年 角谷 優馬

奇妙な縁がもとで日本地学オリンピックに参加し、幸運が重なって私は国際大会特別派遣生徒に選ばれました。

その間、本選で数多くの興味深い人たちに会いました。私の住む三重県ではなかなか出会うことの出来ないような人たちです。私は彼らと関わり、本当にわくわくし、自分の世界が大きく広がったように感じました。日本の中でさえこのようなのですから、国際大会では更に面白い人たちに会えるに違いがありません。そのことを思うと自分の肩書きは非常に輝いたものに思えます。

一方、本選では実力のある人たちが悔し涙を流しながら敗退してしまいました。そのことを思うと、幸運の帰結とも言えるこの肩書きに戸惑います。

この二つの感情に対処する方法は、一所懸命に勉強することの他にないのではないかと思います。

国際大会に集う人たちと密度の濃いふれあいをするためにも、私は勉強に励みます。今度の世界大会では実力で勝負ができるように精一杯努力する所存です。頑張ります。